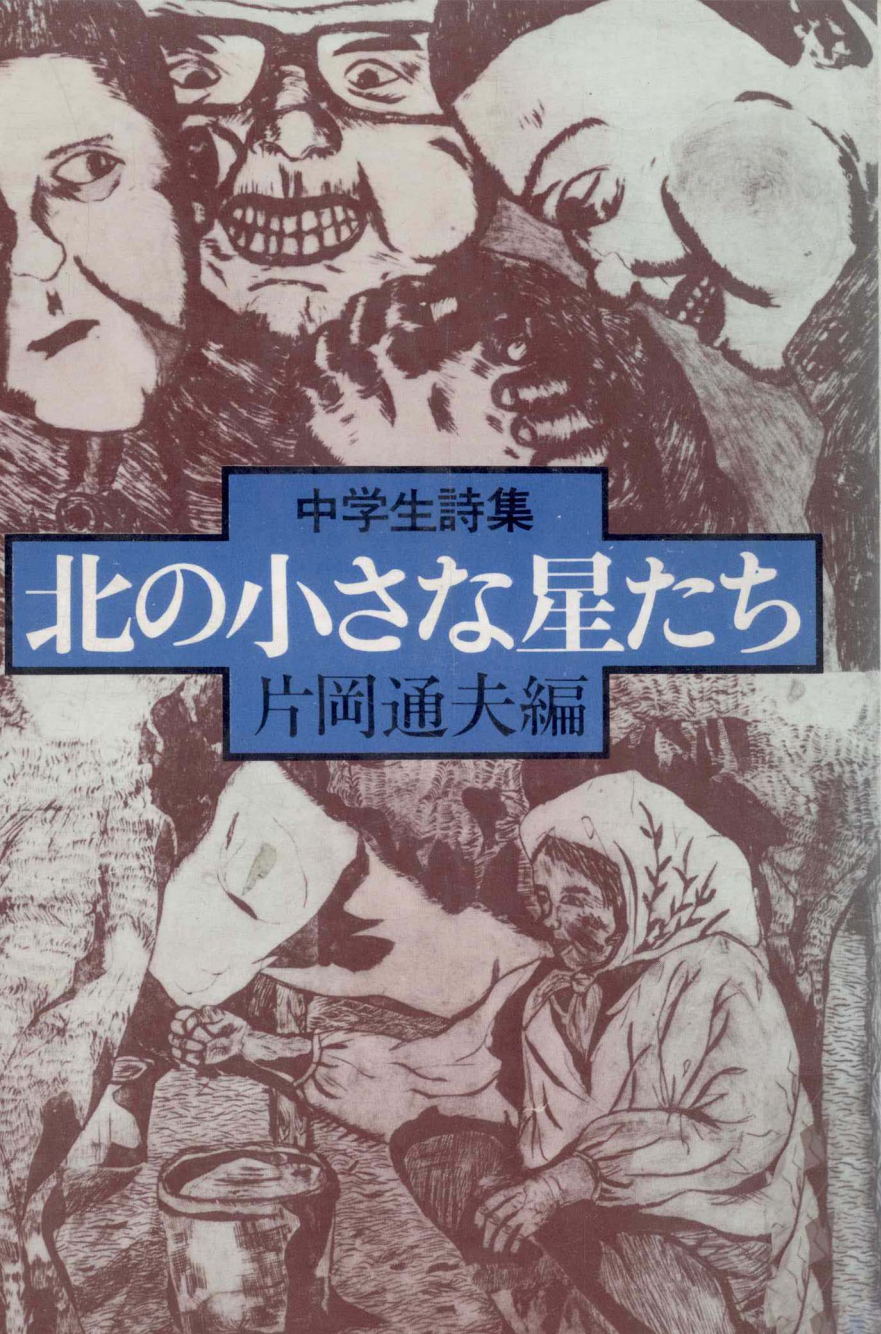




中学生詩集

北の小さな星たち

片岡通夫編

合同出版



詩集

北の小さな星たち

片岡通夫編

片岡通夫（かたおか・みちお）

昭和5年生まれ。昭和26年3月，青森師範学校卒業後，青森県内の小中学校で教鞭をとる。昭和50年10月，第11回北原白秋賞（児童詩教育部門）受賞。現在，弘前市立第三中学校教諭。著書：「体育実践記録・おくれた子どもの指導」（ベースボール・マガジン社），「創造科・詩の教室」（弘前三印社）。

北の小さな星たち

一九七七年八月五日 第一刷

著者 片岡通夫

発行者 宮原敏夫

発行所 合同出版

〒101 東京都千代田区神田神保町一ノ五二
電話・東京〇三（二九四）三五〇六
振替・東京八一六五四二二

印刷 ミツワ印刷（株）
製本 白信製本

・ご請求あり次第総目録送呈いたします
・落丁乱丁のさいはお取扱えいたします

はじめに

I 学 校 1

II 家 庭 45

III 社 会 73

IV 自 然 97

V こ ころ 137

VI か ら だ 173

総論 子どものいのちにふれて 203

——私が歩んできた詩の道程

あとがき

I 学 校



中学生になった。

はずかしいが、うれしくてたまらない。

ちょっぴり、えばってみたい。

しかし一方、中学校とはどんなところだろう、という不安をいだいてくる生徒たちもいるだろう。入学式でも、お母さんが働かなければいけないので、いっしょに行けない子どもたちもいる。そういういろんな子どもたちが、集団で生活している。ちょうど思春期にさしかかった、いろいろ悩み多い時期。その子どもたちの生活や考え方をよく知って教育にあたるということは、とても大切なことである。

塾に行っている子どもが二人に一人はあるという。中学校は高校入試のためにだけあるものか、なんだかこわい。テストって、小さな生命を、死へ走らせることもあると、率直に疑問をなげかけている。

しかし、子どもたちは、学校にすることが楽しい、みんなといっしょにすることがうれしいといっている。もう暗くなるから家へ帰れ、とまわっていても、なかなか帰りがらない。

お昼の時間に弁当を開き、車座になりながら、みんなと語りあう、そんなときに生きがいを感じるという。

学校祭でクラリネットを思いきり吹く。生徒会の募金活動をせいっぱいやる。大掃除のぞうきんを持つ顔が、さわやかに見える。みんなで力を合わせる。友情の花が咲くのである。

断じて学校は、人間不在、人間不信の教育であってはいらないと思う。人と人とのふれあいをもち大切にしていきたい。

学校の先生の手を見ながら、先生をしている自分の母を考える。今までは父母会にも出席してもらえなかった。帰宅しても母がいない。そんな日がつづいているが、ふっくらとした先生の手を見て、仕事と家庭を両立させている母を見なおした〔奈良先生の手から〕中三・佐藤淳子。このように中学生になるとしっかりと成長してくるのである。

まゆげ

わ!! すごいなあ!

かたおかせんせいの

まゆげ

あつくて黒い

おにのようだ

小五 村元 斉

中学生

中学生

ちょっぴり

はずかしい

でも ちょっぴり

えばってみたい

中一 山本 桂子

二中の制服

中二 藤田 世津子

二中の制服に
あこがれていた私
青い色は
どこまでも続く
広い空のように
私の夢が 希望が
空いっぱい
広がるようだ
私は
どこへ行くにも
この制服を着て行く
二中学生としての自覚を
持って

おなか

中一 八木橋 朱葵

お昼近くになると
合図する
おなか
「キュルル」「キュルル」
合唱をはじめ

えんぴつけずり

中一 宮館 浩

えんぴつを
おかしのように
すいこむ

おにのつのように
とんがる

鉛筆

中二 大瀬 富子

教室のすみにかけていた
小さな鉛筆

ゴミをかぶって

ほこりまみれの小さな鉛筆

しんのおれた穴から

じっと見つめている小さな鉛筆

私を呼んでいる

「まだつかえる。すてないで！」

私はふりむいた

彼はもうちりとりの中で

死んでいた

入学式

中一 中畑 和子

入学式の時、一番上の兄が来た。

私が

「まえね、かあさん来いへ」

と言った。

母が

「和子、お金ねば、和子のズックだの

買えねくなるんだよ」

と言った。

でも

やっぱりさびしい。

母が来てくれた方が

よかった。

組がえ

中二 川口 牧子

ちょっぴり不安な

くすぐったいような

胸をワクワクさせながら

私の名前をさがした

心臓がとびあがってきそうだ

「あった!!」

二年二組

いそいで階段をかけあがる

みんなの顔

友だちの顔

さあ、きょうから二年生

もう一度、一からやりなおすつもりで

がんばろう

組がえ

中二 相馬 好子

どうして組がえをするんだらう。

一年生のとき、

やっと、みんなと仲よくできたのに。

組がえは、人間をしあわせにはしない。

組がえは、人間を不幸にする。

せつかく仲よくなった友達と、

またはなればなれになる。

私は

組がえをうらむ。

遅こく

中二 笠井 裕子

あっ！

音楽がなっている

遅こくしたら大変だ

ダツと

走り出した

おもいつきり走った

背中でカバンがおどっている

汗が出た

自分が苦しくなる

まわりなど見ずに走った

ああ……昇降口だ

遅こくをまぬがれた

汗がどっと出て

メガネがくもった

検査

中一 山本 孝夫

先生に叱られるか
など考えながら、
学校へペダルを踏んできた。

自転車の検査の時、
足が地面につかなかった。

不合格の人は

明日から乗ってきてはいけないのだ。
午後の勉強の時は、

頭にはいらなかった。

乗っていいとか、乗るまいか。

家からは三十五分もある。

友達と別れて一人で来るのは

さびしい。

寝坊なので遅刻する。

新しく自転車は買ってもらえない。

どうしたらよいだろう……。

しかし

今日もまた乗ってきてしまった。

行きたくない

中二 沢村 弘美

今日は学校に行きたくない。

ふとんを頭からかぶった。

いつもなら御飯を食べている時間。

時計の音が次第に大きく

リズムを刻ませながら

早く早くとせかせている。

今日は数学がある。

社会科がある、宿題がある。

「いつまで寝てるの！」

と母の声。

しぶしぶ起き出す。

顔を洗って、御飯を食べて……

だんだんふだんの自分にもどってきた。

学校の用意をして

外に飛び出す。

雪がまぶしい まっ青な空がまぶしい、

すがすがしい朝。

勤めに行く人がきびしい顔で通った。

と、その時

私はなんて弱かったのだろうか。

何にあまえていたのだろうか。

自分がとてもみじめに思えた。

人は誰でも目的をもって生きている、

私もひとりの人間として

強く生きなければと感じた。

冷い空気が胸にしみ

つららが太陽の光を受けて輝いた。

新雪を踏みしめ学校へ向かった。

火事

中三 村上 良子

こんなめに
あわなければいけないの

国語の授業中

火事の知らせを聞いた

自分が

夢の中にいるような

遠くから先生が

かすかに呼んでいる

私には考えられない

ふと

ひとしずくの涙が

目から流れ出た

なにもかも

焼けてしまった

神様はうそつき

なぜ

授業の中で

ファー

中二 八木橋 光子

授業中に大きなあくびが出た。

ああ ゆうべも遅くまで起きてたっけ……
きのうのテレビは

おもしろかったな……

頭の中でいろんなことが思い出された。

「八木橋先生」の声が聞こえた。

はっと我にかえた。

質問に答えられなかった。

「失敗 失敗」心の中で思った。

席について 安心したとたん

また あくびが出そうになった。

思わず手で口をおさえた。

早く時がすぎればいい

夜明けまで

中三 蒔苗 嘉

勉強した日は

次の日がとても眠りたい

頭ががんがんして

先生の話がぼやーとしか聞こえない

頭がとてもあつい

早く家へ帰りたい

でも帰ってもまた勉強しなければならない

早く時が過ぎればいい

早く四月になればいい

空気

中三 斎藤 由貴子

授業が終ろうとしている
部屋はあったかいし
先生のお話はあきちゃったし
ふと天井を見上げた
窓から日光がさしこんでくる
ごみ一つないと思った教室
たくさんぶつぶつが
静かに踊っている
着物を着ているのもあろう
ふんわりとした服を着たのもあろう
あっけに見とれていた
ジーとベルが鳴って
夢からさめたようだった

休み時間

中二 佐藤 優子

ストーブのまわりに集まる。
いろいろな話題について
話し合う。
誰もが笑顔で話している。
この時間
どうして短いのだろう。
このままでいたいのに
チャイムは私の気持に
ようしやなく
鳴り響く。